

ルーマン・システム理論における Gesellschaft 概念の有用性の検討

大阪医科大学 高橋顕也

1 目 的

本報告の目的は、システム理論——とりわけ N. Luhmann によって展開されたそれ——において主要な術語の 1 つとして使用される Gesellschaft（およびその形容詞形である gesellschaftlich）概念について、① その多義的な使用方法における論理的＝理論内的な一貫性の有無を検討すること、および② 近代的 Gesellschaft の主要な分化構造とされる「機能分化」の語り方を、Gesellschaft 概念のもつ含意との関連で再検討することである。

2 方 法

目的①については、Schwinn (2013) による Gesellschaft 概念批判を、目的②については、Schimank (2007) による機能分化論の再定式化を、それぞれ Luhmann 自身の主張との主たる比較対象とした。おのこの理論比較を通して、報告者自身の立場を三角測量的に明らかにする。

3 結 果

目的①について

システム理論における Gesellschaft 概念には、大きく 2 つの含意がある。すなわち、i) 「あらゆるコミュニケーションの総和」や「ある社会システムの環境」を指し示す場合の名目的意味と、ii) 「(機能) 分化の主体」ないし「部分システムの分出の出自」や、「システム類型の 1 つ」を、つまり自己言及的に再生産を進める 1 個のシステムを指し示す場合の実在の意味である。この両者が共に同一の Gesellschaft を指示していると考えすることはできないし、前者のみを用いるなら端的に冗長、また後者のみでも経験的適用に耐えない論理的矛盾を生じることが導き出される。

目的②について

システム理論における機能分化論は、実在の意味の Gesellschaft 概念を前提としている。しかしこのことは、システム理論のより基本的な諸前提から必然的に導き出されるものではない。したがって、①の検討から Gesellschaft 概念の有用性が棄却された場合であってもなお、機能分化について語ることができなければならないし、またそれは可能である。その場合、個々のシステムが自律的に再生産をするというシステム理論の基本命題に立ち返ったうえで、「上からの分出」ではなくいわば「下からの発生」を論じる視座の必要性が導き出される。

4 結 論

結論① システム理論の Gesellschaft 概念には大きく名目的・実在的の 2 つの使用方法があるが、これには理論体系内における一貫性がないうえに、経験的記述にも耐えうるものではない。したがってシステム理論の「術語として」この語を定義し用いることは避けるべきである。

結論② ①から導かれるのは、Gesellschaft 概念から出発して機能分化について語るべきではないということである。したがって、機能分化について語るには Gesellschaft 概念を前提としないかたちで行う必要がある。また、システム理論自身にはその可能性も含まれている。

文 献

Schimank, U., 2007, *Theorien gesellschaftlicher Differenzierung*, 3. Auflage, VS Verlag.
Schwinn, T., 2013, *Max Weber und Systemtheorie*, Mohr Siebeck.